

(青土社発行「ユリイカ」2016年3月号より転載)

倉橋由美子文芸賞・選評

旦 敬介

今年度の倉橋由美子文芸賞には昨年よりも七作多い三十三篇の応募があり、その全篇を三人の審査員全員が読み、0点から5点までの六段階で評価した。昨年とくらべて面白い作品がふえていることは明らかで、「高校生活を多少不機嫌に描く」という「ありがちな」作品もほぼなくなった。興味深かったのは、ある審査員が5点をつけた作品に別の審査員が1点しかつけないようなケースがひとつならずあったことで、「それこそが文学だ」という意見が審査員会で出た。つまり、文学などの表現活動においては、全員が3点をつけるような平均的な作品はむしろだめな作品であり、評価が分かれるようなもののほうに可能性があるということだ。

とはいえ、四年ぶりに出た大賞作品「河童」に関しては全員の高評価が一致していた。この作品は農学系の大学院生の寮にある日、何の脈絡もなく河童があらわれるという非現実的な設定に基づいた幻想文学といえる作品で、なぜ、どのようにして異界からやってきたのか、人間の世界と河童の世界との間の地理的構造はどうなっているのか、など、わからないことだらけなのにもかかわらず、読み手を納得させるリアリティを持たせることに成功していた。安定した擬古文調の文体もそこはかたないユーモアを醸す効果をもって有効だった。水がすべての生命の間を循環しているものであるにもかかわらず、人類は人類の利益になるという観点でしか見ていないという副次的な主題も最初から一貫していて、エコロジー小説としても読めるという評価があった。

佳作となった「蟻」もまた夢幻的な側面をもった奇妙な作品である。蟻を潰すという細部や、舞台となる町の構造へのこだわり、女子生徒との奇妙な交錯、不審者の存在をめぐる怪しい出来事などを通じて、不気味さを巧みに盛り上げていくのはデイヴィッド・リンチの映画を思わせるという感想が出るほどだった(褒めすぎ)。危うい精神バランスの中を生きている学校教師の独白だけから成り立っている作品だが、論理的な文章では決して表現できないものを扱っている点で実に文学的な作品だ。しかし、そうした面白い部品が全体の中でうまく生かされていない。ほのめかしにとどまっていることをもう少しヒントをふやして明らかになるように書き直してみる価値はあると思う。

「神木」は現代的な男女の性愛をめぐる哲学的な対話からなる作品で、恋愛文学への批評ともいえる。主人公は次から次へと女たちを移っていくチャライ男なのだが、セックスや恋愛について正面から語っていくところに意外さがある。しかし、村上春樹に倣ったような比喻や台詞に白けるところがあり、題名も意味不明でまったくよくない。「蟻」もそうだが、題名に魅力がない作品は他にも多かった。

「On your mark」は類例がほとんどないスポーツ小説として目立った。競技中のアスリートの心理描写に新奇さがあり、敗者の再生の物語としてのポジティブなメッセージもよかった。あまり強い主題を打ち出すことなく次々と場面が移っていくロード・ムーヴィー的な作品という特徴も面白く、必ずしも純文学的な主題や手法にこだわる必要がないことを思い出させてくれる作品だった。

このようになり特徴のちがう四作品を今年は受賞作として選ぶことができた。倉橋由美子らしい文学賞になってきたのではないかな。

(ユリイカ掲載記事の転載を、ご快諾いただきました青土社に感謝申し上げます。)